「北一明記念館」開設式おこなわれる！

10 月 24 日、北一明記念館開設式が、10 時から飯田市江戸町の生家前で行われました。式には新聞を見て来られた近隣の方々も含め約 40 名が参加しました。

開設式には、法政大学名誉教授、元法政大学総長の田中優子氏をはじめ、飯田市長の佐藤健氏、広島大学名誉教授の金田晋氏、飯田市の橋北まちづくり委員会の気賀沢公彦委員長、江戸町自治会長吉田政司氏、さらには、中国大使館より大使に代わり１等書記官の岑松（シン・ショウ）氏などが参加しました。マスコミ各社も取材に駆付け、熱心にメモを取っていました。

田中優子氏は祝辞で「北一明はアートと平和を結び付けた。記念館が平和の発信地になるよう願う」また佐藤市長は「北さんは飯田で必ずしもよく知られていないが、今後は業績を理解し記念館が平和を考える場になれば」と挨拶。金田氏は美学の専門家の立場で雑誌世界に書いた中味を紹介、北の業績を称えました。その後来賓各氏によるテープカットと参加者一同で記念写真を撮りました。記念館内の見学会が行われました。

見学した住民の方は解説を聞きながら口々に「近くにこんなすごい人がいたということは知らなかった。皆さんにもっと知って欲しい」、また広島・長崎の被爆者の痛みを表現した青や金色ににじむデスマスクの釉薬の涙を見て、「自分も涙が出た」と話していました。展示室にはこの他に「耀変天目」の茶器・書など約６０点の作品が展示されています。

資料室には、北の自筆原稿やパンフレット類、顕現美を表現したカレンダー類などがあり、見学者は各々手に取ってみていました。

北一明記念館は、菱田春草記念公園に近く、江戸時代の武家屋敷の面影を残す「離騒一宇」を改修した小さな記念館です。国内外で反核・平和を訴えてきた北一明の作品が展示された、記念館の開設が飯田の共通の財産として新たな息吹を添えることに期待しています。

左より主催者代表田中義教氏、金田晋氏、佐藤健市長、田中優子氏、岑松氏、気賀沢公彦氏

挨拶する左より田中優子氏、佐藤健市長、金田晋氏

北作品を鑑賞する左：田中優子氏と地元の自治会長吉田氏、大沢氏ら　　右：岑松氏、金田晋氏

左：デスマスク「死屍累々」　　右：資料室で貴重な資料に驚く田中優子氏ら

地元各紙、中日新聞、信濃毎日新聞、南信州新聞等に掲載されました

中日新聞　2023年（令和5年）10月25日（水曜日）　アルプス　16

反戦、反核の訴え 陶芸に

飯田 郷里に北一明さん記念館開館

陶芸を通じて反戦、反核を訴え、国内外で評価された飯田市出身の北一明さん（1934～2012年）の作品を展示する北一明記念館が24日、同市江戸町で開館した。北さんの平和への思いを後世に伝えようと、母校の法政大関係者らが約10年かけて開館にこぎ着けた。（長崎光希）

北一明さん＝御厨徹さん撮影

鉛色に純と光るケロイド状のいびつな塊。部分的に素焼きの表面がむき出しになった作品。青や金色にじむ釉薬の現に苦悩が浮かぶ。広島、長崎の被爆者の痛みを表現した北さんのライフワーク「デスマスク」を中心に、約60点が0畳ほどの部屋に並ぶ。江戸時代から残る武家屋敷の生家を改修。保管している500点の作品を順次入れ替えて展示するという。

1972年に創作を始めた北さん。広島、長崎やアウシュビッツの土を材料に使い、反戦への思いを練り込んだ。中国南宋時代の曜変天目の再現を目指し、分厚い灰色の釉薬で複雑な虹色の光を反射する技法を確立。生活のために作った茶わんや湯飲みで実験を繰り返し、デスマスクに転用した。

北さんの作品を撮影してきた写真家の御厨徹さん（73）は「デスマスクを通じた反核の訴えこそが、北さんが本当に表現したかったもの」と話す。

原爆を訴える創作活動の原点は10歳で迎えた終戦。軍国教育から平和主義に変した教師たちの態度に衝撃を受け、後に「私たちの意識は戦争の渦中に残され、地獄に落ちた」と手記に記した。

80年代からは北米で巡回展を開催。90年に中国で開催された300点ほどを整理した。昨年10月、遺族から借り受けた生家を場所とすることに決まり、改修などを進めてきた。

準備会共同代表の田中義教さん（78）＝日中友好協会副会長＝は、「戦争の犠牲になった人の苦しみを芸術に落とし込んだ北さんの思いが、ウクライナやパレスチナで悲劇が続く今こそ伝わってほしい」と願っている。

入館無料で、開館は不定期。

問田中さん＝080（6528）2504

母校・法政大関係者ら尽力

展示されているデスマスク

平和への思い新たに

市長らテープカット

開館を祝い、テープカットする関係者

同館で24日にあった開設式では、関係者が北さんの遺志を伝える拠点の誕生を喜び、平和への思いを新たにした。

設立を呼びかけた大学関係者や、飯田市の佐藤健市長ら約40人が出席。テープカットで開館を祝った後、館内を見学し、北さんが作品に込めた思いに改めて触れた。

記念館準備会名誉会長で、元法政大学総長の田中優子さんは「平和とアートを結び付けた方。世界で核の脅威がなくならない中、強いメッセージを突きつけてくる」とあいさつ。佐藤市長は「飯田でも北さんのことは必ずしも知られていない。この記念館で業績を知り、改めて平和を考える場になれば」と願った。

アルプス版

飯田市浜井場小5年 片桐ゆ稀 ぼくは、ユーチューバーになりたいです。理由はヒカキンの動画を見て、ヒカキンのようなユーチューバーになりたいと思ったからです。実現するためにはゲームを上手くしたいです。実現したらゲームじっきょうをやりたいです。

芦部信喜さん功績、人物に焦点

講演会は12月3日午後2

北さんが手がけたデスマスクを手にする田中さん＝いずれも飯田市江戸町の北一明記念館で

きた・かずあき

本名は下平昭一。法政大大学院中退後、工芸評論家をへて独学で陶芸作家に。曜変天目の光彩の原理を初めて解明し、自身の作品に落とし込んだ。デスマスクなどの作品は国内外で高く評価され、広島平和記念資料館（広島市）、大英博物館（英国）、ブルックリン美術館（米国）などに収蔵されている。80年代には、ノーベル平和賞の候補にも挙がった。

陶芸など通し反核平和訴えた芸術家

北一明さん記念館 故郷飯田に

生家に並ぶ作品50点

北一明さん（北一明記念館提供）

記念館に展示される北さん制作のデスマスク（北一明記念館提供）

陶芸作品などを通して反核平和を訴えた飯田市出身の芸術家、北一明（本名・下平昭一）さんの記念館が24日、同市江戸町の生家で開館する。2012年に亡くなった北さんの遺志を継ごうと、母校の法政大学関係者らが開設を準備してきた。北さんが制作したデスマスクや器などの陶芸作品計約50点が並ぶ。

デスマスクは広島や長崎、アウシュビッツなど戦争に伴う多くの犠牲者が出た場所の土を練り込み、核兵器の炎で焼かれる人の顔を表現。手びねりで荒々しく成形したり、鮮やかな緑や青に色づけしたりした陶器も展示する。

記念館準備会によると、1934（昭和9）年生まれの北さんは、戦前に父親が政府批判で弾圧を受けたことから、幼い頃から反戦平和に関心を寄せた。大学卒業後、陶芸に引かれ、独学で技術を習得。79年の米スリーマイル島原発事故以降、反核の思いを込めた作品を制作した。

準備会共同代表の田中義教さん(78)＝東京都＝は「ウクライナやガザで戦闘が続く中、絶対に戦争や核の使用はいけないとの思いを伝えられたら」と話している。

記念館は不定期開館で、24日は開設式終了後の午前11時～正午と午後3～5時に開館。25日は午前9時～正午に開く。その後は未定。入場無料。問い合わせは田中さん(☎080・6528・2504)へ。

今日の視角

2023.10.24

北一明記念館

江戸文化研究者
田中 優子

陶芸家の北一明氏は1934(昭和9)年、飯田市に生まれた。そして今日は、生家に北一明記念館が開館する記念すべき日なのである。私も本日、現地で開設式に参加する。

北は2012年10月19日に亡くなった。今日は命日に近い。昨年のやはり同じ頃、没後10年の「偲ぶ会」を法政大学で開催した。北は法政大学社会学部の卒業生だからである。

私は総長になる前、社会学部長を務めていた。毎日のように北の陶壁モニュメント「泉―不戦の誓い」の前を通って学部棟に入り、「夢」という文字のレリーフの前を通って教室に行ったのである。「泉―不戦の誓い」は、世界を巻き込む渦の中に多くのデスマスクが浮かぶ作品で、生命と残酷な死との両方が同時に見えるのである。北の陶器のデスマスクは、世界的に知られている。

北は、中国・宋時代の茶わん「曜変天目」に、星のような斑紋や美しい光彩が生じた「曜変」のメカニズムを解明した人なのだが、それより、原爆と核の脅威を表現した陶芸作家として、ノーベル平和賞に推挙されたことで知られる。とりわけ1979年の米スリーマイル島原発事故以後、広島、長崎、沖縄、南京、アウシュビッツ、そしてスリーマイルをテーマにして、米国と中国を中心に、世界各地で展覧会を開催した。

陶器は茶席を拠点に、日本の伝統美を表現するものと考えられている。西欧でも食器や陶器人形を思い浮かべる。北はその既成概念を破り、陶器を彫刻として造形した。なぜならそこには「火」があったのだ。原爆の爆心地の温度は3千度から4千度だという。デスマスクは陶器だからこそ、そこに迫る千数百度の熱で作られる。人の個としての「顔」は、熱によって死にながら唯一無二の存在となった。北のデスマスクは、戦争が打ち続き、その拡大すら懸念される今日改めて、強い反戦のシンボルとなり得る。

10月24日信濃毎日新聞

毎日新聞
第三種郵便物認可

反核の志 結晶が眼前に

芸術家・北一明さん記念館 飯田で開館

反戦、反核を陶芸作品などを通して訴えた飯田市出身の芸術家、北一明（1934～2012年、本名・下平昭一）さんの記念館が24日、同市江戸町の生家で開館した。同日に現地で開いた開設式には、記念館準備会の関係者や地元住民ら50人が参加。館内には北さんが制作したデスマスクや器などの陶芸作品約50点が展示され、作品に込めた思いに触れた。

□ □

デスマスクはユダヤ人虐殺の舞台となったアウシュビッツ、被爆地の広島・長崎など戦争で多数の犠牲者が出た場所の土を練り込み制作。記念館準備会によると、核兵器の炎で焼かれる人の顔を表現した作品、犠牲となった人の苦しみを表現したと思われる作品など20点ほどを展示している。来館した近くの安藤由美子さん44は「亡くなった方の生前の輝きを感じた。戦争を知らない私のような世代にとって貴重な機会だ」と話した。

作品の多くは、北さんが独学で編み出した「曜変」と呼ぶ手法が用いられ、鮮やかな緑色や青色の輝きを放つ茶わんや器などもある。生前に30年以上親交があった広島大名誉教授の金田晋さん85＝美術学＝は「北一明は平和主義の思想に基づき制作を手がけた。曜変はデスマスクで涙などの表現に使っているが、陶器などの他の作品でも同じ色合いで表現されている。作品に平和への願いを込めていたのではないか」と話す。

北さんは、法政大の卒業生。開設式で、記念館準備会名誉会長で法政大前総長の田中優子さん（本紙「今日の視角」筆者）は「ウクライナやガザで戦争が続く今こそ、記念館が平和の発信地になってほしい」と述べた。

記念館は不定期開館で、25日は午前9時～正午に開く。その後は未定。入場無料。問い合わせは準備会共同代表の田中義教さん（☎080・6528・2504）へ。

「平和の発信地に」関係者期待

開設式の後、館内の展示物を見る田中優子さん（右）ら関係者

舞って うたって 伝統の能楽体験

来日

伊那市

回伊那能

聚や市、

でつくる

能楽の体

学校で開

人が、出

千代さん

マイクロ水力発電 来秋開始

小売電気事業者「飯田まちづくり電力」を通じて市内へ供給される予定で、市は事業主体

約245、0）削減

存定の低

南信州新聞　2023年（令和5年）10月25日　水曜日　1部90円　日刊

思い継ぎ平和の発信地に

出身地の飯田で　北一明さん記念館開館

飯田市出身の芸術家北一明（本名・下平昭一）さんの記念館が24日、生家である同市江戸町の展示スペース「離驢一宇」で開館した。デスマスクや茶碗、書など作品約50点を展示。北さんが世界で訴え続けてきた平和や反核への思いを伝えている。

北さんは飯田で育ち、法政大学を卒業後、独学で陶芸技術を学んだ。宋の時代、「曜変天目」を作った。

広島、長崎、沖縄、南京、アウシュビッツ、スリーマイル島などをテーマに、作品を通して反核、平和を訴え、広島や南京などの土を練り込んだデスマスクを数多く作成。世界から称賛されノーベル平和賞にもノミネートされたこともある。2012年に生家で死去した。

24日の開設式には準備会メンバーのほか、法大前総長の田中優子さんや佐藤健飯田市長ら約40人が出席。テープカットで開館を祝い、展示を見学した。

準備会共同代表の田中義敎さん（78）＝東京都＝は「北さんは飯田ではあまり知られておらず、北さんが世界に訴えてきたことを後世に残したかった」と思いを語った。田中優子さんは「北さんは平和とアートを結びつけた人」と表現。「今も戦争は続いており、北さんの遺志を継ぎもっと平和や核廃絶を伝えていかなければ」とし、「記念館が平和の発信地になれば」と期待した。

北さんの死後、理解者たちが、生家に運び込まれていた膨大な作品や資料を整理し、ボランティアで家の改修を進めていた。18年に記念館建設準備会が発足し、昨年に生家で開館することを決めた。

記念館は入館無料。不定期開館で、25日は午前9時から正午に開く。その後は未定で、飯田のまちのイベントに合わせて開く予定。問い合わせは田中義敎さん（電話080・6528・2504）へ。

記念館開館を祝うテープカット

核による苦しみを表現したデスマスク

太陽光で「本当に走った！」

県の環境体験学習会　ソーラーカー作りに挑戦

県南信州地域振興局環境課と豊かな環境づくり飯伊地域会議は22日、豊丘村神稲の営農支援センターだいちで環境体験学習会を開き、親子連れがソーラーカー作りに挑戦した。

学習会は、子どもたちに体験を通して地球温暖化

南信州新聞

集会で渡辺義巳県本一　参加者が活動報告。一などと発言しました。一方、松山市で行われ、

反核平和 陶芸で表現

長野・飯田 北一明氏の記念館開設

反戦・反核を訴えた芸術家、北一明氏（1934～2012年）の記念館が長野県飯田市の生家（江戸町）でオープンしました。24日の開設式には、法政大学前総長の田中優子さんら40人が集まりました。

北さんの作品を説明する前総長の田中氏（右から2人目）と共同代表の田中さん（左端）＝24日、長野県飯田市

北氏は法政大学を卒業後、独学で陶芸技術を学び、中国南宋時代の曜変天目の再現に成功し「耀変（ようへん）」の技法を確立。広島、長崎、南京、アウシュビッツの土を練り込んで反戦・反核・平和の魂を込めてデスマスクを創作しました。

北氏の没後10年を節に、法政大学の関係者や芸術家らが記念館開設に向けて作品を整理し生家を修復しました。費用は募金でまかないました。

開設式のあいさつで前総長の田中氏は「北さんは世界が直面する核の脅威を作品で表現し、メッセージとして届け続けています」と語りました。佐藤健飯田市長らもあいさつし、中国大使館の寄松（しんしょう）1等書記官が列席しました。

準備会共同代表の田中義教さん（78）は「ウクライナやパレスチナで悲劇が続く今、反核平和を陶芸で表現した芸術家を知ってほしい。記念館を平和の発信地にしたい」と語りました。

記念館には「怨・刻終えん」「死屍累々（ししるいるい）」と題して目から涙をこぼすように表現したデスマスクや茶器、書など数十点を展示しています。入館無料。開館は不定期で次回は11月3日を予定。問い合わせは田中義教さん（電話080〈6528〉2504）まで。

10月30日しんぶん赤旗